開明小説

春雨文庫

二編

上

A416
3

松村春輔編輯

開明小説

春雨文庫

二編二冊

櫻雨園社中蔵版

48-7521

春雨文庫二編之自序

雲ゆき雨旋してとゝ易の乾の詞なるを雨そぼつ窓の下。瓶に挿したる白梅の香り志のばるゝ古画も大禹の代より黄金は雨墨は武帝の時代より玉の雨きゝ渾ぬるを。青雲は雨を年代記に見え葉の雨い歴史に載たるも。夢も十日の雨玉に水を彼らぞ鯢の魚に雨に集り。雨虎に雨に葉

しく出づ。高羊の雨は先たつて霽ひ。
石燕は石を破つて発ぶ。たゞんと之を咸る
の徒然なるまゝに出でゝ陸雨の宮潭に
ましゝと旅人の願ふを野路の俄雨五七の
の笑ひも。雨ふつて地こゝまれとかゝれ
来歴古事は書籍文庫の奥にふかぐで。
還て川留は岸に清き矢水桶にも
餘りぬれば不破の関屋の板びさし。

大方を漏しいたゞく。細雨書屋の
雨ふり梅子熟ゝ序文の代るまたん。

于時明治十年二月上旬
細雨亭の窓下に記

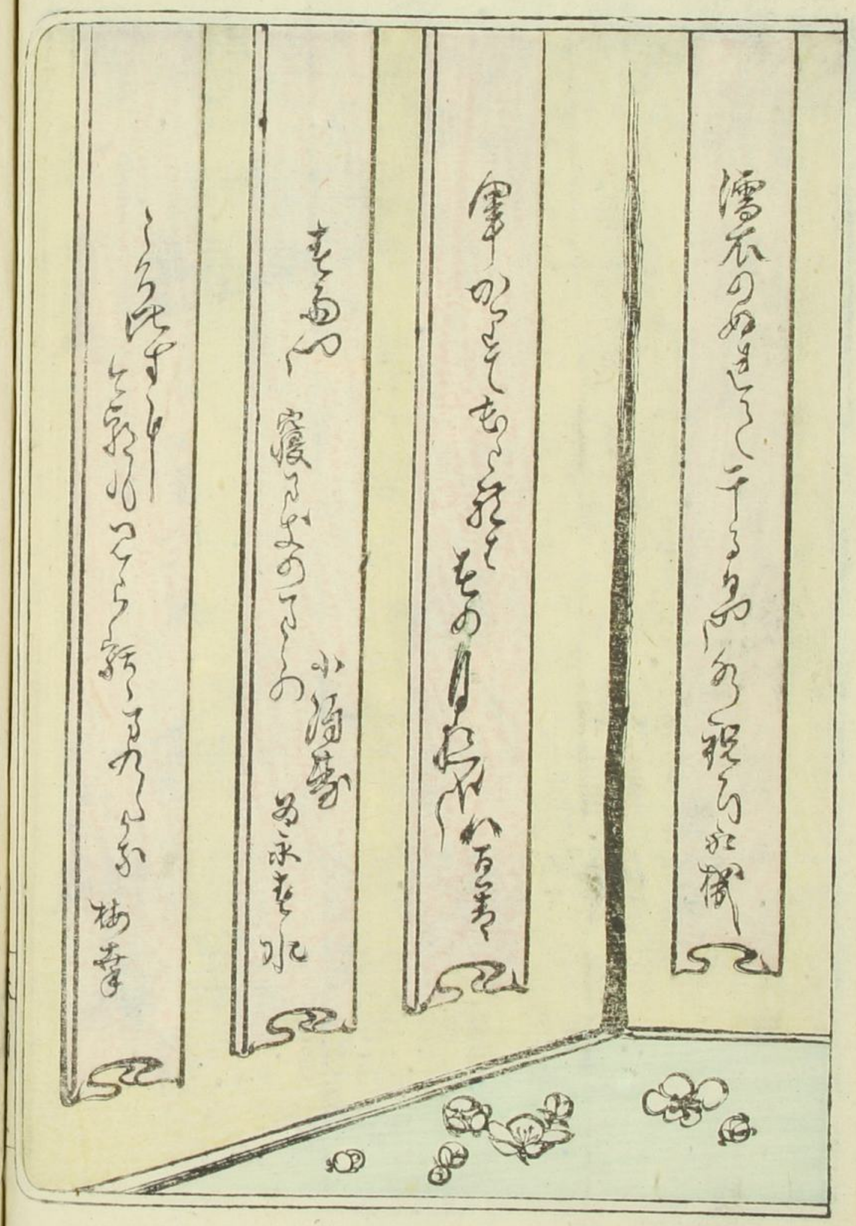
松村春輔

幕府の
權を恐
れぞ一
丈夫
の歴史
俵屋
清兵衛

清兵衛
妻阿岩

北野神社之景
笹井吉三郎

吉三郎
女房於増
ちとせぶる藤
彩みのたうまき
せうの形
きこえゆく神の
松の下つゆ
大久保春驪



春雨文庫第二輯巻之上

松村春輔著述
大久保春驪校訂

第四回

東京

まつうえの木れ罵ふ凡西る神垣や。風光有らゐ
あるゞ。あるらん。と頓阿ゞ詠れし言の葉の志を
り残聞ん子規听ふ北野の御神れ灵験今も著明
なるとゞ商法繁ぜう金まうけ何卒配せて下さいと

こを理る願ひを懸まくも恐こき灵前参詣の人の絶
間も夏すぎて秋とし言ひ淋しさの増〳〵一ト群立
騒ぐ雲ふたらつく雨脚の早きハ時の日和ゑせ晴り
て出し夕月もまゞ三日四日の細眉ふ木の間小ぐらき森
の蔭身形やつれし一人の男ゞ訳ハ白歯の娘を連れ往
るやとる其振も衰れ杖を力ふ〳〵びきの山路るら
ぬも息を切ら吉さん再降て来さゝゞ孫エ雲ゑ
むらつへて居るゞ最降りハ仕ゑ何ぞゝ道ゞ滑瀞の

で自已ア実ふがつゝしさ肥つゝお在ざゝ只ぐ
さん服ゞ摩てお困りゞのゑ此間ゝ無理る道を歩
行とのゞ踏出しゝ脚元ゞだん〳〵悪いのゞョまア吾倆の
肩へまゝりゝと捕つてお出る手前ゞッて痛と拵らへ
疲つゝ居るぢやア孫ゑ丈ゞけもども其様ゑ痛
くゝ無ョトロでい言ゑど敢果ゞゝね足の運動を男ゑ
察し「急いゝて往く當の孫ゑ旅の空此処らで一服
やらゝさゝゝト傍の松の切株の露と拂ひて腰と懸を

で女も側ふ腰とかけ男の顔と覗ひて見るなら「ちつ
と彼様して居る間ふ膝を揉ませうと」男「なアふ宜手前も
草臥て居らアト言ひるなら忍いず ホッと溜息四邊と
見まわして」男「ウお婆さ方ふも思いぬ難儀とかけ自己も
此様なふ苦しそと為るくらね借金が有うとも生
ふ居るのが楽であると便りあって来と人ハ知れず路
用の金ハ悉皆なくなる病ひい次第ふ重い足元我身な
がらも愛相の盡とまろう合せホンニ智恵の移人男ぶと

思つまとキアあ人うと女房のお前ふ對しても面目移人
文アレマア何様して其根な夏と思ひまたとものう手怜悧な人
でも間の悪くなると彼様しともので有りませうから平
常の通り強い心ふ成て居て下さいる移エ後生ざらうサト
言さ人も潤む声音ふ堰あ人ぬ泪見せドト話しと移「夫
ママア宜いとして今夜の趣向いどう仕ませう移人「自己も
夫と案ドて居るのサ無拠ば今宵ハまて野宿と為るふ
もとよ土地の容子ハ知らず賣る物ハ色一昨日よりな

身を行路
ふ迫りく
死んとを

昨日昨日よりハ今日〻日ハ日ハ迫る身の雑伐明日の
凌ぎの思案ゲたら祢へ実ハ力と落させんと今まで
隠して居さけまども脚氣の層とが増して来て最
一ト足も歩行祢ん〻〻目已ァ覚悟と極て右まろ〻〻うんず
知らずの他人でも女の身ゑ〻〻世話の右〻くれ人々
有う手前ハ跡ハ残つ〻居て何しろユ丈をつけてくを自
已の命ハ惜くハ祢へゲ手前の躰ゲ案ゞられるト言と半
も吹き敢ず女ハ其処ハ泣ハ〻〻色戀で逃さのぢやァ

る〻〻三年以来ほを〻〻〻良人のお前ゲ彼様〻〻と事か
ら死で仕舞と其の後で誰と便りハべん〻〻と生るゲら
へて居らをませう故々を放れ知らるハ土地で草の肥〻
ハ成て果るも約束ごしごと諦めて居りますゝ〻何卒
一所ハ死〻てトかき口説れて〻男ハいとゞ声を曇らせ眼
をきゞ〻〻き常〻〻知つて〻一徹る其方の気性さう〻〻〻〻
了覚るゑ〻〻どうせ留ても止るめ人ハろその腐れ此処で
二人ゲ女ァイ死で未来で何時までもト言つ〻顔を見逢せ

て思ハずワアッと声立れば男もよゝト忍び音ふいとゞ
つゆ
露のけき黄昏ふ松の梢ふ啼梟千草ふすゞく虫さ
へも共ふ衰れを添へふけり
茲ふ漂泊二人の素性を尋るふ男ハ備前ふ岡山
在小田村の農夫ふて筰井吉三郎とよび者力量
衆人ふすぐれ相撲を取り剣術を遣ふとを好を
田畑の業ふハ却て疎ゝ又女ハふ婿といへる者
ふゝ三年前ふ隣村の某より娶り仲睦まゝく

暮しけるゞ歩ぢく不仕合ふ借財嵩めて京へ
出て俱ふ稼ぎ質入の田畑を請戻さんなど相談
ゝく世帯をあらまひ小田村の家を賣拂ひ差ゝ當
る負債のかとつけ聊残りし金を以て路費となし
西京の知己を便りふ都の空へまゝろさし上りたゞ
折悪く土三郎脚気を踏出ゝ間ぞる旅ふ貯への
路銀を無くゝ辛ゝて京ふ着ゝ力とたのむ知己
の家を尋ねゝふ去年の秋ごろ故国へゝ立のき

我が往く先を知らずと言ふまゝに頼みの綱きれて途方を失ひ思いずも迷ひ北野の夕まぐれ偖あて死んと覚悟い為したる此一條い由ゑき贄言ふ仰らりと雖も既ふ初編ふ解ときろの島田佐兵衛ゞ木屋町の別荘君香のもとふ命を絶るるの濫觴なるまい看官去ぢらく退屈を忍びて狂もさの末を御覧あらんとぞ欲ふのを

吉三郎夫婦の者い身の寄るべきなゝくも覚悟あるゞら衰ーさの又今さゝふ泳增ーて震ふ手元ふ腰かいさぐり心細帯引きかどき死ふ小野の森とも知らず松の下枝へうちかけく引き翻る葉ずへの雨二人ゞ袖を濡まさり涙ふ呉て居ゝゝ吉三郎い乳を励ま「人の来ぬ内ふサア早く」アイと去增も身支度ゑ既ふ縊死よと見えたる折しも「彼救助ト女の声「ハツと答ふる詞と共ふ木蔭を飛び出る二人の侍吉三郎とお增を抱きとゑ「ゝゝゝず短気

の振まひを致すまひぞト動くさ袖を「ハッとぞりゐ愕く
両人「何方さぬらい存じません」ゲ何卒さの場をお見逃
し放して死なせく下さいまし」あせりて止らぬ二人ゲ
傍へ社殿の方より徐々来るい年のころ四十ぞうりの
上端ゐく被衣を外し声とやうゐ「其方らちゲ窮迫の
ちい前の程より物ゲで殘らず聞こく居りまし」と死
うと名ゐを若気の誤り仮令一時い袖ぞひして人の門
辺ゐ立うも容易ゐ命い捨られまひ今日ゐ名ぎりて

黄昏ゐ此御社へ参詣せしい其方たち二人を救助よ
りの威徳天神のお指揮ゐよるものぞらん悪い様ゐい
為ぬおどゐ気と安くして居とゲ宜いコレ衛士衆二人を
大造労れと拵子よく介抱して連て来ヤト物柔らう
ゐ解諭さと吉三郎とお増の二人い夢ゐ夢見し心地
しつハウと斗りゐ平伏たり
吉三郎お増を助けし北野の社へ参詣の婦人い如
何なる者ぞ下田ゐ名ら在自然しく解らぬ

総て是ある一回い劇場ふ比較べ発端と唱ふる場所ふて喜永五年九月の事ふる次回ハ文久二年二月中旬の説話ふして前の條よりハ十年後のことゝ見玉へかし

第五回

洛中を少し離れて閑静を占れど諸物ふハ事かゝぬ清水寺の坂の下黒板塀ふ家をかこひ門を這入れば根府川の乖石斜ふ敷法〻孤黄楊山茶花の刈こと剪刀の手際ふきりと石燈籠ふむす苔も當所ふ言き住居とゝれど二間の玄関あらとわく表ふ懸し各札い東湖風の筆勢よく六代經験整骨處荒井宗意と書記し玄関ふハ白布ふとく手を巻き足を緘げたる人々多く坐つどふ療治の番の来るなひざと待草卧て已が隨意百轉の口かしまく未ざ何ざゝふ寒いでいはぬいませぬゝ左様さ子夫ふ応てハ一昨日の初午ふハ伏見の蒼稲竈へ大さう人が出うけまと

■料理屋などい大ぶん賑りさん許たん世間ふい無
益ゑ金田〳〵をふくものが有りますて手イヤ夫でも拙
子らのやうふ年が年中がちく〳〵して居て鼻の先の觀
音さんへもろく〳〵お参りとせね様な者をうでい盛
う場の人さちの活計が立ません手イヤ觀音さ
んと言ばお別當の月照さんハ宜いお方であらッ名や
つとが負ることがえらいお嫌ひぢゃものをドやがッイ此程
逃亡を為なさるのい借金の訳でい有ります事ふ何

ら外国人が来てく〳〵襟裡さんと関東の代官らの間
が混雑つき景気がどゑ銭まうけも有りません
因ふ云ふ清水寺の住僧成就院月照い外国船渡
来のたゑふ日本の国體を失ゑたんを気憂ひ攘
夷鎖港の激徒と共ふ志をとげんと力を竭し同意
の者と密ふ我寺中へかこまひ置きゑどせしが
此ところ幕威なる盛んふして是らの黨を探索す
ると厳酷なるをば諸藩士と共ふ逃亡しく難を

西國ふ道るとりへども身を寄すべきの所るく憂
苦と慷慨ふや堪えざりけん絶ふ薩州の海ふ身
を投じ国家を思ふの念力より果るき際悟を遂
しとをん

「月照さんを異人ぎらいから起つて脱走ふ遠ひるい
らの話し江戸で正月の十五日ふ御老中の安藤の登
城をる伐待うけ坂下門の前で浪人が大勢取りま
き切く掛つたとふを是も元の起りを異人どらの評

判異人らう江湖上ふ寐でとの多く成さふ困り切り
まに免角ことみうをどアく折うう奥の療治場で
「ト七番のお方ト呼ふ声を吟つけ「ハイ〳〵いや漸と呼
ゲ参りまし〳〵ト此時表のうさようして年齢三十四五
ふく衣服髪飾もきつとせし女が小腰を屈め入
り来り案内を請ふ声きつけ「誰と應へく立出る
内弟子らしき惣髪男が今来し年増の顔を見て「
とれい関東都石さんのお内方お婦さんサアく〳〵こち

ら人「まつぴら市免ないそだしまして玄関ゐ居る人
々へも會釈をしつゝ療治場へ通るゐ乃得世の中の見
員とたのむ相撲取の如才内儀と知らもさり主人の
宗意を療治を為るゝ「コレハ珍らしいお詣さんら
宜く来るすつと冥取あゐ此あひだ祇園ぐ一寸あひ
まして其後かたつとるすもどざらんらナ「バイ抜ドる
ゝ手前ゐがまけ大き無沙汰を致しまして宿でも
宜しく申し訳いとせるものと言るゝ幅紗包を取

ひろげ「此品い例の驚知らず餘り少しでいごさいみゲ
洗場のお客かくくおゑしきくとくとお目ゐ掛ます一宗一
盃やるあい何よりの物毎度お礼のどくすと療治お
るぐくお坊へ扨扨お坊いおしい膝をすゑ「アノ今度宿
でい依前の岡山へ與行よ下りますゲ古々と言ひ
を出くくくく初めく来るのでございまたゐ自分用や
何々とかけく餘計ゐ間々とれますわゲ二夕月三月
へ帰らるまますまひまゲさくく些隙けいくゐ紛るませ

んゲ例のお書業を十色をわど願つて裁けとやしまくと
「夫い目出くい話く関取の話しゐ吹て居る久しぶりでの
古々の錦まんしのメだいゲ為ることで有う僕ゐ於ても礼
ゲ勇む書業い今延して上るかくゐ少し待て居さくゐの
是ヨ次のお人を傍ゐ居る弟子ゲ大声さて「ハイ十八番め
お方トよゲまて「應と答へく隅紙へゲてし小座敷よ
り伸を者ゲく立出くい此ごろ京で人の名と知る目
明しの文吉と言くくゐの幕府の光りと冠ゐきて虎の

威と借る狐毛の袗まき散眼顔ふあくりこをなぐら「
先生お袴ふいとあい附袴人かゝ何卒叮嚀ふ療治を
お願ひやす「ハイ何処と痛めさしやつさのぎ「私のゝ
古い赤身でどぜんやす今年であかけ五年前島田様
かゝの江内意で近衛家の村岡とふ女をたゞめ諸
藩の者と召捕るとき橋本左門とふ奴と引組で縁
ゝ庭へ落さたゞをゝ御影の飛石で脇腹を突やし
とゞ撲身ふ成ととえて暑サ寒サのかたりめふい兎

角痛んで困りやすト向ず語りの手柄だるーを側ふ角
みるお婦ふ夫と顔を見つめツ膝を寄せ手ふ握りたる
煙管の羅宇の摧けて折るも知らぬ半り脳かゝら
んづ勢ひあり「ぶホッと一息忽地ふ首をたをて思案の
姉文吉つりろ肌ぬぎ「先生ゝの処でどぜんやす「只
今。サア お増さん お膏薬ゞ出来すゝと折ゝら何れの童
子ふや声張り上て小学讀本
「神ハ暗き所も明クふ見るゝのゆゑ人の知らざる

所と思ひて假ふも悪きことと為せば忽ち罰を蒙る
ぞ「人の知らざることも神は能く知る世の善
きことのみ幸ひと與え悪しきことのみ禍ひを與
へるぞ」

遥ふ聳ゆる東福寺の十二時の鐘ボオーン町内の夜番
が「火の廻り〳〵太鼓の音ドンドコドン〳〵」モシ関取ちよろと
目を覚してお呉んなさいと言ふてアノモシ何様すまあ
此様ふ眠らせるのさらうぢれつたい今日は朝ッから

お酒をうち飲でお阪い些少も食らるのいのごョひよろと
紛ふ當ッて悩煩ひでも仕たと日ふい何と思つてとッて及ぶ
ないい事ヨウお起るさいと言へば行ット肩のあたりを揺
振らと「ヲ何をするのゞ七五月蝿おきる時分ふやア
勝手ふ起る歩捨ておいて寝いて「夫でも今日ゝ一
度も阪をおゝで無かゝサ「稲川ぢやア行ッゞ阪るく
食ゝ行ッ阪と眠のと当分の内絶久とゝのさへ夢
現ふゝ又ゞゝと大鼾お掛い眛顔を覗きて「目ゞ

覚みけるやア夜着をまくッて撩弄よ「コレ戯掛るナ可止ト
いつたら止ねへのゝ少時間もつゝ遣ふと云ふと小五
月蠅とゝを仕やアがるゝ後彼の下言ひかけて他の家へ
泊るシゞ外へ出ると客の機嫌をとり家へ帰ると嬶ふい
びゝ責らるをちやア精気も根も盡てゝまはア「オヤ仏
時吾倘ゞいびりまゝゝエ「左れぬゝすのゞ責ンどゞと
言葉ふ立る波風を降所ふるゞして最ふ顔を和ら
げ声を低うゝ「少しも除けい冥取の心の休むやうふ

仕ないい吾倘が平常の願ひどゝゝ眠ゞつてゝ在のゝと無理
ふ起すい怨禊けをども壁ふ耳ある今の世の中昼ハ
あゝりを憚りて落々話しの出来ぬと云ふハ此間荒井
先生さんの家で支て来さ一件彼をマア何と思つてゝ
在ゞエゝと身を揺りよせて向かけらを此方ハ涼々曰
をこすり欠ゝるゞゝ面倒さうふ「何と云ふうと自
己の力ぢやア田作の歯ぎしりで遅付祝人さるの村岡
さゞゞ捕をゝと云るのをゝるゝず冥東へ引き下さ

れさうへ黄泉へ旅ぢちあさまと他人子ゐて云つてゐると女達らゐ淡傍とろの連中ゐ一味あさまとかゝるのを自業自得とあきらめるより外仕方ゐ旅人夫と残念と思ひ筋骨だーとおの當坐と今さゝ監えてゐると逆恨をでゐつと芝居でをる様る筋がきの入り但ざとゐ関係のゐ此方の畑ゐやア根入り ざゝりい風のすやうゐ隨つく荷物と遅ぶが肝心ど火事場ゐ齊しい江湖上恩の義理のと騒ぎまゐれば焼死ぬとも言れ旅人銭ゐ成らゐゐ力瘤ゐ出さずゐおるのヘンまア徳用ざらゝト四十八本銀鎖からんど事ゐ扰辺ゐ抛出ーて有る煙草入を畑管の先で引よせて畑草の煙を輪ゐふきゝ空うをぶいく居る顔をゐ増る兄詰忙然とものとも言ひ得ず居たりしが落る涙のたゝくト掛ー二タ条の前ざをゐ掩ひーー膝と躙りよせ「関取そもぢやア済ますまい立た苦の無い一ト往昔あと人羊へて末の秋ゐ前ゐ連らゐと古々でをるれて此地へ来る途中

お前い御気を踏出し尋ねし人い空蟬のかゝふ成たる
財布の紐と松の下枝ふゑげ掛さと思ひ出せを戦慄
とする天神さゑの御山とも知らで二人ゲ手ゑ手を取
り北野の森と消るところを旦那さゑ村岡さゑゲ夜参
りふと出るさゑとお戻り道お目ゑ止ッてお救ひ遊けお
前も兵倆も見の痛と西所よ来とお手尊いお世話で
稼るゝ丈夫ふ成るとお前い力量ゲ有るうゝとてお
出入りの都冨士親方へ旦那さゑよりのお声かりで元

〻〻好る角力とゝり世間の人ゑも
名と知らを仲間のうちでも立らをて抜群
出世と誉そやされ人並勝れと
暮し成為るのも旦那さゑの皆
お蔭夫ゝとの事を
辨へぬお前さん
でい無い悟気嫉妬と
言ゝゲ否さふ今まで悋

えて居さが祇園の藝子勇鶴ふ心をひらさまと乳が迷
ひ後れが出さのでほいたいませう平常ふい男の事ども
のヲ藝子ぐらいも保養の一ッ世ふ云ふてくらき咎めい
せぬが大事の敵と笑きさ出しるがら理と非ふまげて
言ひ紛らし一可惜月日とべんくとお酒ふむたり碎て
居るのい関取腰が抜けまくと悔し涕と欣てん
で口ふ任せる雑言と耳ふも入をずせら笑ひ「フ女達
らふ感心イヤあらいものさ勇鶴の身の上い少し沢が

あるくと自己が引きうけ世話として遣ら祇人ト身の
振り方が六ういい女ざト言て丈ふ掛りあひは恩ふ
あるくとと我忘れてい仕辞りぬ村岡さんが藤生
でも為るとふ面白へ訳るく彼様して棄ちやア
置祇人けきども返らぬ旅路へおがるくくんまを乳
の揉ざ人が仕祇人くく丈うり我くう手と付ぬが
マア尚世ろと思ふのョと亦も袖と引き寄せて夜具
引き被げでお掩いあきれ暫時こどでも無りしが

きんと思案の胸を定め何様でもおまんがさう
しさ気なく吾侑ア吾侑の覚悟ぞ有るそんな
ふ眠くんごあらうとこそろの済まぐ寝くおいでト
言ウ・立く帯由り上げ身おしらんさんかるぐト
床ふかけくる都石ゲ秘蔵の刀をあろ取りく佳
細き小脇ふ掻こをウ小褄と高くひき端しくり紙
く表の方へいでんと為るみそ遽しくも裳裾ぐ煙
管の厂首ふく一寸捺へつ起かくり「何處へ往のぐ

「且那さんのお後をおひろけ冥途へ由くのでは往
います「そりや亦何様しく「ハイおまんの魂し
為るおの刀ぐ尋ねく置く文吉の家へ今かく
そぐゑ出くらって用有る振りぐ呼びいぐ怨
その一ト太刀勝をよく負れを直ふ黄泉ふ在す
村岡さんのお側へ往きおまんい腰ぐぬけくから
お前の代理ふおまんの刀ぐ働きまーくとヤー
上げお前のお倍禮を為るくろと思ひきろる

挨拶を聞く合点都石何らの事と言ひ出るや所

い次四と讀て知りわしし

春雨文庫二編上之巻終

010190509449